

Y13a VR×プラネタリウムドームによる科学コミュニケーション活動の評価

平松正顕（国立天文台）、高梨直紘（東京大学）、川越至桜（東京大学）、日下部展彦（アストロバイオロジーセンター）、佐藤祐介（和歌山大学）、亀谷和久（国立天文台）

バーチャル空間にあたかも入りこんだように様々な体験ができるバーチャルリアリティ（VR）は、科学コミュニケーション活動（以下、SC活動）においても様々に活用されている。一方、VRゴーグル等の機器使用に対する障壁があり、VR機器を利用して多くの人がSC活動に参加できる状況にはまだなっていない。

この課題の克服を目指し、VRコンテンツをプラネタリウムドームに投影する形の科学コミュニケーションの実践を行ったのでその結果を報告する。2024年9月にディスカバリーパーク焼津天文科学館で実施したイベントでは、前半にパワーポイントを投影した講演でアルマ望遠鏡について紹介し、後半にVR空間に構築されたバーチャルアルマ望遠鏡をドームに投映し、アバターをまとしてVR空間に入ったガイド役によるガイドツアーを実施した。イベント後のアンケートでは「立体的に理解できた」「実物を見ることでよりわかりやすかった」など、VR空間でのガイドツアーが理解度向上に役立ったことが明らかになった。一方、参加者と講師とのコミュニケーションはイベント最後の質疑応答時間に限られ、ガイドツアー中の臨機応変なコミュニケーションは生じなかった。この点は、個々人がVR機器を使う環境で先行して実施したバーチャルツアーとは大きく異なる。「プラネタリウムは静かに聞くもの」という意識が働いた可能性や、プラネタリウムではガイド役が来場者の様子を見ることができなかったことなどが理由として考えられる。講演ではアンケート結果の分析をもとに、VRとドームを使ったSC活動について議論する。